

## 讀注疏「本」字考

著者	寺田 范三
雑誌名	漢文學會々報
巻	1
ページ	45-52
発行年	1933-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00146155">http://doi.org/10.15068/00146155</a>

## 讀注疏「本」字考

寺 田 范 三

注疏を讀んで行く時、それに付け添へてある唐の陸德明の經典釋文の音義が訓讀を示してをります。が、もし付け添へてないものは別に釋文の音義を見ることになりませんが、その中に出て來る「本」といふ字が、如何なる意味で用ひられてあるかを、探究してみようとするのが、本日私の申上げる目的であります。

その本字の用ひられてある意味を探究するには、その音義を示してある釋文書中から多くの例を拾ひ舉げて、之を考察して、その相互間に如何なる連鎖が横つてあるか、又如何なる相違が介在してあるかを調べてみ、更に進んで注や疏の中には、同じ本といふ意味を表すに、何といふ字を用ひてあるかを舉げて、此の注と疏と釋文との三者の比較考察を施して、そこに私の卑見を申上げて、本字の用ひられてある意義を知らうと思ひます。

今本字の例を舉げると、禮記注疏卷一（曲禮上）四枚表六行の曲禮上第一の次に陸曰、本或作曲禮上者、後人加也。尙書注疏卷一（序文）一枚裏六行に古者伏羲氏之王天下也とある所の釋文に伏羲氏伏、古作慮、犧本又作羲、亦作戲、辭皮反。周易注疏卷五（姤卦）五枚表十行の經文「九二包有魚、无咎、不利賓。」の釋文の音義は別本になつてゐて付け添へてないから、その別本を見ると本亦作庖、同白交反

とあります。

この本字のある所を列擧すると大抵以上三例に歸するやうであつて、めつたにこれより異例は見付かりません。即ち本字のある次には、或と又と亦との三字が各、位してをります。その爲にこの本字を一本と解すべきであるといふ論が生ずるわけであります。現に私共二三の者が北平に居て楊氏を聘して禮記注疏を講讀して貰つた時、楊氏も本字は一本の意味であるといひました。

それで今一本の例を擧げてみますと、禮記注疏卷四十七（祭義）十一枚裏十行の經文「郊之祭大報天而主日配以月」の鄭注に主日者、以其光明天之神可見者莫著焉。とあつて、釋文に神見賢遍反、一本作神可見、則如字。儀禮注疏卷四十六（特牲饋食禮）十二枚裏二行の經文「沃尸盥者一人奉槃者東面、執匱者西面、淳沃、執巾者在匱北。」の鄭注に淳沃稍注之、今文淳作激とあつて、釋文は別本になつてゐるからそれを見ると、激古狄反、一本作淳、劉本作激音狄、春秋左傳注疏卷七（桓公八年）四枚表二行の經文「少師謂隨侯曰、必速戰、不然將失楚師、禦之望楚師。」の杜注に遙見楚師とあつて、釋文に將失楚師、一本無師字。とあります。

この一本の意味を決定するには、先づ本字の使用が之と類する他のものを擧げて比較討究し、又一の字の用法如何といふことをも附隨問題として調べて見る必要があると思ひます。乃ち本字の使用法の相類したものに他本・餘本・諸本等があります。何れも孔穎達がいつた言葉で、今之を禮記注疏の中に認めることが出來ます。即ち卷四十七（祭義）十一枚表四行の經文「既入廟門麗于碑、卿大夫袒、而毛牛尚耳、鸞刀以剗取腠膂乃退、爛祭祭腥而退、敬之至也。」の鄭注に爛祭祭腥、或爲合祭腥泄膂熟也。とあ

つて、孔疏に云爛祭祭腥、或爲合祭腥泄臠孰也者、謂爛祭祭腥四字、禮記他本爲合祭腥泄臠孰六字者、故云或。と之が他本の例であります。卷四十五（喪服大記）二十四枚裏九行の經文「凡封用綽去碑負引の鄭注に封周禮作窆、窆下棺也。此封或皆作斂。とあつて、孔疏に此封或皆作斂者、謂禮記餘本。と之が餘本の例であります。卷四十一（雜記）一枚裏八行の經文「有父母之喪尙功衰、而祔兄弟之殤、則練冠祔於殤、稱陽董某甫、不名神也。」の鄭注に「此兄弟之殤、謂大功親以下之殤也。とあつて、孔疏に此注諸本、或誤云大功親之下殤、故諸儒等難鄭云、既是下殤、何得有弟冠、范宣子庾蔚等云、不殤者傳寫之誤、非鄭繆也。と之が諸本の例であります。

そこで此の他本・餘本・諸本等の本字の使用の相類したものから考へて行けば、一本といふ意味は、或他の本といふのであります。或他の本とすれば、又その或他の本とは、或他の一種の本であるのか、それとも又或他の數種の本であるのかを決定しなければなりません。

次の例によると、

周易注疏卷一（乾卦）十二枚裏一行の經文「不成乎名、遯世无悶、不具是而无悶、樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔潛龍也。」の釋文の音義は別本にありますからみると、一本作不成乎名。とあります。そして阮元の枝勘記と對照すれば、不成乎名の下に石經・岳本・閩・監・毛本同、釋文出不成名云一本不成乎名、按疏云不成就於令名、以於字釋經文乎字、則正義本與石經合。とありますから一本作不成乎名の一本は石經・岳本・閩本・監本・毛本等に相當することになつて、一本とは勿論或他の本といふ意味で、而もそれは只一種の或他の本といふばかりではなく、數種の或他の本といふことにも解されて來ます。

それから本字を用ひてある所を疏や釋文の中から拾ひ集めると、定本・今本・古本・俗本・等があります。が、是等は皆その標準とする所から與へられて、名を得たものであります。こゝではその考證を省略いたします。

先に附隨問題として一字の考察の必要を申上げましたが、それは一音・一解・一號・一云・一曰など、なつて用ひられてをります。即ち

儀禮注疏卷二十五（公食大夫禮）二枚裏二行の經文「甸人陳鼎七、當門南面西上、設扁鼎、（鼎者東若編）の鄭注に扁鼎杠、所以舉之者也。凡鼎圓蓋以茅爲之、長則束本、短則編其中央、今文扁作鉉、古文鼎皆作密。とあつて釋文に鉉胡犬反、一音扁、劉古頑反、又音玄、又音關。禮記注疏卷四十一（雜記）十枚裏五行の經文「醴者稻醴也、甕甗符衡、實見間、而后折入。」の釋文に見音間厠之間、棺衣也、注同、如字、注同、徐古覓反、一解云鄭合見間二字共爲覓字。音古辯反。尙書注疏卷一（序）一枚裏六行の孔序に古者伏羲氏之王天下也、始畫八卦、造書契以代結繩之政、由是文籍生焉。とあつて釋文に張揖字詁云、羲古字、戲今字、一號包羲氏。全九行の釋文に書者文字、契者刻木而書其側、故曰書契也。一云書契約共事也。儀禮注疏卷四十一（既夕禮）十六枚表六行の經文「志矢一乘、軒輜中、亦短衛。」の釋文に輜音周、字林云重也、一曰輜也、又音弔。とあります。

是等の一の用法も亦或他のものといふ意味に解されますので、前の一本が或他の本と見て勿論肯定さるべきことであります。が、注疏や釋文中には之を何々本といつて、明瞭に姓名又は姓を擧げてゐるものが多くあります。又何々と姓名又は姓だけを擧げたり、姓の下へ氏字をつけて何氏として擧げたりして

をります。

その一々の考證は省略して、その例だけを申しますと、王肅本作愚人。「號徐本作虎、胡刀友。」長丁丈反廬植・馬融。王肅並直良反。「禱丁老反、鄭云求福曰禱。」服虔注云、寢謂小寢也、皇氏熊氏其說各異、未知孰是、故兩存焉。」があります。

其の他に姓名を擧げずに書名を擧げたものに、春秋傳曰、是謂我非夫。「辭本又作詞同。說文以詞爲言、詞字辭不受也、後皆放此。」夕惕他歴反、怵惕也、鄭玄云懼也、廣雅同。「屨字林戶臘反、闔也、纂文云古闔字。玉篇羗據公答二反、皆云闔也。」があります。

一本の意味が決定して來れば、前に溯つて本字の意味は果して如何。論者の如く之を一本と解すべきか。私は本字を一本と解することは出來ません。寧ろ舊と解すべきであると思ひます。よつて次に注や疏や釋文等の中から數例を擧げて來て、之を論じてみますと、

禮記注疏卷四十（雜記）二枚表五行の經文「其輦有綵、緇布裳帷、素錦以爲屋而行。」の鄭注に輦載柩將殯之車飾也、輦取名於輓輿、舊讀如蒨飾之蒨、輓棺也、蒨染赤色者也。儀禮注疏卷四十六（特牲饋食禮）十一枚裏七行の經文「篋巾以綵也、纁裏棗栗擇」の鄭注に舊說云纁裏者皆玄被。とあります。

以上は鄭玄の注の中から拾ひ擧げたものでありますが、舊字は今に對して用ひてあります。舊讀如蒨蒨之蒨といつてゐるのに對して、釋文に輦千見反、注與蒨同。といつてをりますから、舊時の蒨蒨之音が、今日の千見反の音であります。又舊說云纁裏者皆玄被といへば、今日は玄被といはぬに對してをるのは明であります。之は鄭玄のいふ所であつて、陸德明はどうかと調べてみると、やはり舊字を用ひ

てゐる所が多くあります。即ち

禮記注疏卷一（曲禮上）十枚表一行の經文「禮聞取於人、不聞取人。」の釋文に「取於舊七樹反、謂趣就師求道也。皇如字、謂取師之道、取人如字、謂制師使從己。儀禮注疏卷二（士冠禮）四枚裏八行の經文「緇纒廣終幅、長六尺。」の釋文は別になつてゐるからそれを對照すると、纒山買反、舊山綺反。禮記注疏卷四十五（喪服大記）四枚裏八行の經文「小斂大斂、祭服不倒、皆左衽、結綬不紐。」の釋文に紐女九反、舊而慎反。とあります。

是等は陸徳明の舊字を用ひて説明した場合で、其の字は舊時に於ては何と發音してゐたかを明にして、之に對して今日は又如何に發音してゐるかを並べてをります。纒山買反といふのが今日の音で、山綺反といふのが舊時の音であります。同様に紐女九反が今日の音で、而慎反が舊時の音であります。初の例の取於舊七樹反といつて舊時の音だけ擧げて、今日の音を相對して擧げてないのは、思ふに今日も亦かく發音してゐるのであるか、それとも別に發音してゐるのであるか、之では分りません。次に皇如字といつて梁の皇侃の説を引いてをります。其の次のに取人如字とあるから、別に發音の反切を示さなくとも、取といふ字が既にその音を表してゐたからであります。然し禮記注疏卷四十九（祭統）三枚表二行の經文「既内自盡、又外求助、昏禮是也、故國君取夫人之辭曰、請君之玉女、與寡人共有弊邑、事宗廟社稷、此求助之本也。」の釋文に取七住反といつてをります。即ち先には舊時の音七樹反だけ説明してあつたが、こゝで現時の音七住反を示してをります。先の如字といふのは即ちこの七住反でありました。

又舊字の下へ更に音字を附けて舊音何々といつてゐる例もあります。意味はやはり前の舊字だけのと

同一であります。即ち

儀禮注疏卷二十四（聘禮）六枚表九行の經文「皆玄纁繫長尺絢組。」別本の釋文に絢呼縣反、劉云舊音縣、李胥倫反、一音巡。禮記注疏卷四十四（喪大記）一枚表六行の經文「疾病外内皆埽、君大夫徹縣、士去琴瑟、寢東首於北牖下。」の釋文に牖音酉、舊音容、下注疏下放此。がその例であります。

さていよ／＼結論になつて參りますが、この舊字の意味が本字の意味と同一に用ひられてゐることを私は主張するものであります。その本字に舊といふ意味で用ひられてゐる考證をしますと、

毛詩注疏卷一之一（周南關雎詁訓傳第一）一枚表六行の釋文に故訓舊本多作故、今或作詁、音古、又音故、案詁故皆是古義、所以兩行、然前儒多作詁解而章句有故、言郭景純注爾雅則作釋詁、樊孫等爾雅本皆爲釋故、今宜隨本不煩改字。とあります。

即ち舊本多作故、或作詁といへば、今まで私の申しました舊字は今字に對して用ひてありまして、その終に今宜隨本不煩改字とあるから、この今字が本字に對して並べられてあつて、本字の意味は前の舊字に當るべきものであります。

周禮注疏卷一（天官冢宰）一枚裏六行の經文「惟王建國辨方正色」の鄭注に建立也、周公居攝而作六曲之職、謂之周禮、營邑於土中、七年致政成王、以此禮授之、使居雒邑治天下。」とあつて、その釋文に雒音洛、水名也、本作洛、後漢都洛之陽改爲雒。とありまして、この本作洛といふは舊時洛と書したが今日では雒と書してゐることを相對稱したのは明である。それは後漢が洛之陽に都して改めたから、それ以來今日に至るまで雒と書すといふ意味で、後字は本字に對して今と舊とを表してゐることは勿論で



あります。

周禮注疏卷十（地官司徒）二十枚裏九行の經文「以本俗六安萬民、一曰媿宮室、二曰族墳墓、三曰聯兄弟、四曰聯師儒、五曰聯朋友、六曰同衣服。」の鄭注に本猶舊也とあります。

こゝに於て本と舊とは相同じく見て差支ないことと思ひます。之は今まで論じて來た本字は舊字の意味であることを立證してゐるものであります。宜なる哉、陸徳明自身もその禮記注疏卷四十四（喪大記）十枚表九行の經文「徹帷、男女奉尸、夷于堂、降拜。」の釋文に於て説明して、夷于堂、如字、陳也。本或作俛、同音移、一本作奉尸于堂。といつて夷を説明する同一場所に於て、本と一本とを相並べてゐるのは、明に本は一本の意味でなくして、舊の意味であることを自認してゐるものといはねばなりません。尙三四之と同様な例がありますが、こゝに省略して本講を終ります。（昭和七年十一月十二日）

## 竹書紀年について

原 富 男

一、竹書紀年の價值——價值は古本に在るので今本にはない。——杜預先づ之を認め、爾後諸書援用——紀年可以正經史曆法之誤——結語

二、汲冢出土考——汲冢出土とは、——汲冢出土の時、——埋藏の時及び發掘の場所——襄王の墓の所在——出土篇目——杜預の篇目——東晉傳の篇目——書斷の篇目——汗簡所引書史の篇目——紀年及師春の出土は確實。